

南インドのナラシンハ信仰

井上 貴子

1. はじめに

2003年4月から1年間、南インド、タミルナードゥ州のタンジャーヴールに滞在している。タンジャーヴールは、隣接するカルナータカ州マイソール西方の西ガーツ山脈を水源とし、東南に向かって流れる大河カーヴェーリ河口デルタ地帯の頂部に位置する。この地域はタミルナードゥ州の穀倉地帯で、古代より灌漑用の水路が建設され、様々な王朝の首都となってきた。現在では人口約20万人程度の一地方都市にすぎないが、チョーラ朝（13世紀末頃まで）の時代、10～11世紀頃に建設されたブリハディーシュワラ（シヴァ）寺院は世界遺産に指定されている。この時代には大規模なヒンドゥー寺院が数多く建設され、それらは今日でも人々の信仰を集めており、参拝客が絶えない。

さて、今回の調査の目的は「インドにおける音楽学と芸能の実際」というテーマで、音楽学によって構築された「伝統芸能」に対する観念が、政府の文化政策や広く一般の人々の芸能観の形成に大きな影響を与え、それが実際の芸能の存続にいかに関与しているかを明らかにしようとするものである。そのため調査対象に選んだ芸能の一つがバーガヴァタ・メーラである。これに関しては、すでに拙稿「南インドのタミルナードゥ州における言語ナショナリズムと芸能」（『比較文明』16号、2000年）において簡単に論じている。また、今回の調査を踏まえた論文は帰国後刊行

予定であるが、本稿では、特にバーガヴァタ・メーラの最も重要な演目である『プラフラダ物語』の背景となる神話と信仰を中心に紹介したい。

2. バーガヴァタ・メーラと『プラフラダ物語』

バーガヴァタ・メーラは、タンジャーヴール周辺の農村で演じられているテルグ語の舞踊劇である。今世紀初頭頃までは6つの農村で演じられていたが、現在でも上演を続けている農村は、メーラットゥール（M村）、サーリヤマンガラム（S村）、テーッペルマータール（T村）の3つにすぎない。役者はバラモン男性のみであり、彼らはバーガヴァタと呼ばれている。バーガヴァタという言葉自体は、狭義にはヴィシュヌ神を最高神とするヒンドゥー教ヴィシュヌ派の一派であるバーガヴァタ派の信徒をさすが、広義にはヴィシュヌ派信徒一般、さらにヴィシュヌ神に関連する芸能を行う男性役者、歌を交えて神々の物語を語るハリカターや宗教的な歌を歌う音楽家の敬称として用いられる。かつてはバーガヴァタ・メーラの役者たちも専門家であったろうが、今日では全員がアマチュアで、通常は他の仕事につき、村外に居住している者も多く、上演の季節のみに集まってリハーサルを行い、本番にそなえるのである。音楽家に関しては、タンジャーヴールなど近隣に居住する専門家を招聘するが多い。

バーガヴァタ・メーラは、年一回ナラシンハ生誕祭の前後に上演される。準じる暦の種類によって異なる場合があるが、通常はヒンドゥー暦でヴァイシャーカ月白分の14日、西暦で言えば5月初旬から中旬頃にあたる。2003年は、M村とS村では5月14日、T村では15日であった。

生誕祭当日に演じられるのが『プラフラダ物語』である。これはヴィシュヌの10化身の一人ナラシンハの生誕にまつわる物語である。ヴィシュヌは、世界が乱れると様々な姿に化身して世界を救うとされている。最も有名なのが10化身で、1番から順にマツヤ（魚）、クールマ（亀）、ヴァラーハ（猪）、ナラシンハ（人獅子）、ヴァーマナ（侏儒）、パラシュラーマ（斧をもったラーマ）、ラーマ、クリシュナ、ブッダ、カルキ（未来の化身）である。ナラシンハは4番目にあたる。1番から3番目までの化身はほとんど信仰対象となっていないが、ナラシンハはヴィシュヌ派信仰においてはラーマやクリシュナなどの有名な神々について重要な存在である。ヴィシュヌがナラシンハに化身したいきさつは、次のようなものである。

三界を制する魔王兄弟の弟ヒラニヤカシプは、兄のヒラニヤークシャがヴィシュヌに殺されたのを恨んで、復讐のために苦行をつみ、ブラフマの恩寵によって昼も夜も、人間にも動物にも、家の中でも外でも殺されない身体を手に入れた。ヒラニヤカシプは、自分だけを信仰し、ヴィシュヌの名を唱えたり祈ったりすることを禁止する命令を三界に下し、神々を恐れさせた。困った神々はヴィシュヌに助けを求める。すると、聖仙ナーラダがヒラニヤカシプの妻リーラヴァティのところにやってきて、彼女の子宮の中の子に「ヴェーダ」を教え、ヴィシュヌ信仰を説いた。こう

して誕生したのがプラフラダである。バーガヴァタ・メーラで上演される『プラフラダ物語』は、ここから始まる。ヒラニヤカシプの一人息子のプラフラダは、父に反抗してヴィシュヌに深く帰依し、どうしてもその信仰心を変えようとしな。怒った父は息子を殺そうとし、妻のリーラヴァティが止めようとしても絶対に聞き入れなかった。そこでヴィシュヌは、昼でも夜でもない夕方に、人間でも動物でもなく、頭は獅子、体は人の姿をしたナラシンハに化身して、ヒラニヤカシプの宮廷の柱から誕生し、家の中でも外でもない門口でヒラニヤカシプを引き裂いて殺し、プラフラダを救った。

各村の上演形態はそれぞれに特徴がある。M村では、若者に古典舞踊のバラタナーティヤムを習わせ、かなり洗練された上演形態をもつ。S村では、ナラシンハがヒラニヤカシプと戦い、身体を引き裂き、その肉を食らうという場面を長々と上演する。一般的にバラモンの間ではこのような残酷シーンはあまり好まれないため、他村では一瞬にして終わってしまう。T村では、ヴィシュヌがナラシンハに化身する以前の物語を付け加えている。各村の台本の作者は異なっており、S村やT村のものは複数の作者による作品を組み合わせているのではないかと思われる。S村の歌の歌詞には複数の作者名が登場する。また、作品は本来テルグ語であるが、T村では、歌はテルグ語とサンスクリット語が混合し、セリフはほとんどタミル語とテルグ語で、合間にタミル語の解説が入る。

3. ナラシンハ信仰の広がり

ナラシンハ信仰の現在の本拠地はアーンドラ・プラデーシュ州にあり、これが最も盛ん

になったのは、14世紀から東インド会社の侵攻まで、南インド一帯を支配したヴィジャヤナガル王国の時代（1336-1649）である。最初首都ハンピ（ヴィジャヤナガル）は現カルナータカ州にある。ここに首都が建設された際、まずナラシンハ寺院が建立され、15世紀前半には寺院はさらに拡大した。すなわち、ヴィジャヤナガル王国はナラシンハを守り神とし、精神的な支柱としていたといえよう。王国は常に北方のムスリム諸王朝の侵攻に備えなければならなかった。三界を支配する魔王を倒したナラシンハは、ヴィシュヌの10化身の中でも最も激しく強く獐猛な性格の神であり、軍事力を象徴している。したがって、この王国がナラシンハを特に選んだのも当然かもしれない。

タンジャーヴールは、14世紀以降、ヴィジャヤナガル王国の支配下に入った。王国は、ナーヤカと呼ばれる官吏や地方領主と臣従関係を結び、各地の徴税と軍事を彼らに委任した。16世紀前半には、当時の国王の義弟がタ

ンジャーヴールのナーヤカとして派遣された。それ以降、ヴィジャヤナガル王国の文化がタンジャーヴールに伝えられ、さらに独自の発展を遂げることとなったのである。王国は、儀礼と行政の両面に秀でたバラモンの官僚を多数雇用しており、彼らの伝承してきた古典語であるサンスクリット語と王国の公用語であるテルグ語の文芸が、タミル語地域に開花する。こうして、ナーヤカ支配の開始と共にこの地域でもヴィシュヌ派信仰が盛んになったと思われる。実際、チョーラ朝の時代に建立された寺院はほとんどシヴァ寺院であり、ヴィシュヌ寺院はナーヤカ時代以降に新たに建立されたり、拡張されたりしたのである。

バーガヴァタ・メーラが上演されるようになったのも、ナーヤカがバラモンに土地や村を寄進してからだといわれている。バーガヴァタ・メーラは、通常、アグラハーラムと呼ばれるバラモンの居住区で上演される。アグラハーラムの西端にはヴィシュヌ寺院が位置し、その前から道が東に伸び、その道に寺院



ナラシンハとプラフラーダ（メーラットウール村）

に向かって仮設劇場が作られる。すなわち、バーガヴァタ・メーラは神に奉納する儀礼的芸能なのである。ナラシンハ役は特定の一族によって代々受け継がれてきた。ナラシンハ役者は出番前からうなり声をあげ、完全なトランス状態にある。ヒラニヤカシプとの戦いの場面では、まさにつかみかかりそうな勢いなので、男性が数人で押さえなければならない。過去には実際に事故もあったらしい。とにかく、待ちに待ただけのことはあってクライマックスは圧巻である。

4. 今日のナラシンハ信仰

主要なナラシンハ寺院はすべてかつてのヴィジャヤナガル王国領内にある。そのうち最も重要な聖地は、ヒラニヤカシプの宮廷のあ

った場所、すなわちナラシンハの生誕地とされるアホービラム（現アーンドラ・プラデーシュ州）で、9つの寺院が集中している。ここには14世紀末に僧院（マタあるいはマツト）が創設され、信仰の中心地となってきた。現在の僧院長は第45代にあたる。また、チェンナイの中心部マイラポールには、「ヌリシンハプリヤ」という主に僧院関連の書籍や雑誌等の発行を担当する下部組織があり、ホームページ（<http://www.ahobilamutt.org/>）も開設されているので、ナラシンハ信仰や僧院に関する情報は簡単に入手できるようになった。こうして、最新の手段が駆使されながら、信仰は変わらずに今日も生き続けているのである。社会は変化しても、強い神は、弱い人間にとってたのもしい存在なのであろう。